様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年　6 月　16 日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2008～2009
課題番号：20730439
研究課題名（和文）パピーウォーカー経験が家族関係に与える影響；盲導犬候補子犬の育成と別れ
研究課題名（英文）The Influence of Puppy Walker Experience on Family Relationship; Fostering and Leaving Guide Dog Candidate Puppy.

研究代表者　濱野佐代子（HAMANO SAYOKO）
帝京科学大学・こども学部・准教授
研究者番号：90413137

研究成果の概要（和文）：盲導犬パピーウォカー(PW)経験が、家族関係に与える影響について調査を行った。その結果、家族がまとまり、家庭での話題が増え、ストレスが軽減され、喧嘩が減り、障がい者のことを考えるようになったということが明らかにされた。また、子どもは、盲導犬候補子犬（パピー）を育成することで、共感性や責任感や忍耐力が身につくことが分かった。さらに、パピーとの別れの悲しみを乗り越えていくことで、家族関係が以前より親密になったことが明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the influence of puppy walker experience on family relationship.The results demonstrated that family was united, topics of conversation increased, the level of stress reduced, quarrels between family members decreased, consideration for disabled person became stronger. Also, it was indicated that children developed empathy, responsibility and patience by raising guide dog candidate puppies. Moreover, the family relationship became more intimate as overcoming puppy loss after leaving.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1200,000	360,000	1560,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1900,000	570,000	2470,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育心理学
キーワード：盲導犬、パピーウォーカー、家族関係、犬、愛着、喪失、発達、ボランティア

１．研究開始当初の背景

盲導犬とは、視覚障がい者の目の変わりになるだけでなく大切なパートナーとなっている。また、盲導犬は、社会と視覚障がい者の間をつなぐ役割を担っており、私たちに障がい者のことを考える機会を与えているのである。しかし、現在、盲導犬を育成する団体は、日本において 9 団体存在し、年間 100

～120 頭育成されている（日本盲導犬協会、2009）が、活動中の盲導犬は 975 頭（竹前、2007）と少なく、多くの視覚障がい者が盲導犬を必要としているにもかかわらず非常に不足している状態である。盲導犬は、視覚障がい者に譲渡されるため、盲導犬育成は基本的にボランティアで成り立っている。そのため、盲導犬育成には、寄付をはじめ多くのボランティアが必要とされている。その中の一つに、パピーウォーカー（以下 PW）ボランティアがある。PW とは、盲導犬候補の子犬（以下パピー）を盲導犬協会から委託され、訓練センターに入所するまでの約 10 ヶ月間にわたり、パピーを家庭で育成するボランティアのことである。この PW は、盲導犬育成に貢献するだけでなく、パピーを受け入れる家族に多大な影響を与えると考えられる。

２．研究の目的

PW のボランティア経験が、家族関係や家族システムに及ぼす心理的学的影響を明らかにすることを目的として調査を行った。この PW ボランティア経験には以下の 3 つの特徴がある。

1)家族全員で「盲導犬の育成」というライフイベントを経験する。

2)家族は、必ず約 10 ヶ月後にパピーとの別れを経験する。

3)盲導犬育成を通して、バリアフリーの社会を考える機会となる。

つまり、PW を行うことによって、家族全員で協力するボランティアを経験し、愛着対象の喪失を経験する。また、盲導犬育成というボランティアを通して障がい者のことを考える機会となる。

そこで、パピー育成中、訓練センター入所前、訓練センター入所後の 3 時点の縦断データを収集し分析することによって、PW ボランティア経験による家族関係や家族システムの心理学的な力動的変化や発達について検討し明らかにした。

３．研究の方法

財団法人日本盲導犬協会の協力を得て、PW の中で調査に協力してくれる家族を募集した。調査協力者の中から、現在 PW を行っている家族 10 組を対象とし、3 時点で各家族構成員全員に調査を行った。1 回目はパピー育成中、2 回目は訓練センター入所約 1 ヶ月前、3 回目は訓練センター入所約 1 ヶ月後に調査を行った。

調査方法は、面接法を用いた。家族関係の力動的変化を捉えるために、家族の構成員全員を対象に調査を行った。盲導犬候補子犬の育成と別れの経験により家族の関係やシステムは心理学的にどのように変化発達したかついて、縦断的に調査した。

(1) 調査協力者

日本盲導犬協会を通して、小学生の子どものいる PW 家庭で、調査を承諾してくれた 10 組の家族を対象に調査を行った。調査協力者は、その家族の父親、母親、小学生の子どもであった。

対象者は、30 代～50 代の父親と母親、幼児、小学生、中学生、高校生の子どもが 1 人から 3 人いる家族であった。

(2) 調査期間

2008 年 8 月～2009 年 7 月に調査を行った。

(3) 測定方法

調査協力家族に半構造化面接調査を行った。調査協力者に対しては、面接実施前に、本研究の目的、面接内容の IC レコーダ録音の承諾やプライバシー保護等に関する説明を書面にて行い、家族代表者に面接承諾書に署名してもらった。面接場所は、各家庭か訓練センターの 1 室にて行った。基本的には、家族全員がいるときに訪問し、調査を行った。質問に応じて、一人一人を指名して回答して

もらった。面接者は全て著者自身である。面接時間は約 60 分から 90 分であった。会話は IC レコーダーに録音し逐語録データを作成した。

（4）調査内容

面接調査の質問項目は、以下のとおりである。なお、親子共通の質問項目、親のみの質問項目がある。

共通の質問項目

① PW をはじめて変化したこと

② PW をはじめてよかったこと

③ PW をやっていて困ったこと

父親、母親のみの質問項目

④ PW をはじめて、子どもに影響したこと

（5）分析方法

①面接調査の分析は以下の手順で行った。まず、面接調査の各質問項目で得られた回答をいくつかのカテゴリに分類した。カテゴリの分類は、一つのエピソードに一つの意味を含むように区切り、はじめに小さな下位グループを作った。それを発言数として算出した。その後、同じ意味でグループ分けしカテゴリに分類し、その内容を示すカテゴリ名をつけた。カテゴリの分類と内容、命名に関しては、心理学の専門家と協議し検討した。

②3 時点の縦断データを質的に分析し、パピーの育成と別れの経験が PW 家族にどのような影響を及ぼすかについて、具体的なエピソードを引用しながら考察した。

４．研究成果

（1）カテゴリに分類した結果、家族とパピーとの関係に関する質問に対するエピソード数は 504 あった。内容によりグループ化した結果、上位カテゴリとして、『パピー飼育による影響』、『パピー飼育の子どもへの影響』、『飼育のたいへんさ』の 3 カテゴリに分類された。『パピー飼育による影響』の下位カテゴリとして、「社会貢献」、「社会をつなぐ役割」、「家族をつなぐ役割」、「健康促進」、「ストレス軽減」、「快適なかかわり」、「責任感」、「経験の広がり」の 8 カテゴリに分類された。『パピー飼育の子どもへの影響』の下位カテゴリとして、「情操教育」、「世話」、「緩衝する役割」、「成長」、「社会貢献への意識」の 5 カテゴリに分類された。『飼育のたいへんさ』の下位カテゴリとして、「環境整備」、「しつけ」、「犬の性質」、「世話のたいへんさ」、「世間の非理解」の 5 カテゴリに分類された。以上、18 カテゴリに分類された。カテゴリ名と内容、発言例、父親、母親、子ども別の発言数を Table1 に示す。

Table1 カテゴリ名と定義と発言例

	カテゴリ名	定義	発言例	発言頻度 父	母	子
パピー飼育による影響	社会貢献	視覚障がい者に意識がおよび，ボランティアを行って社会貢献をしているという発言。	〈PWはボランティアであると意識して行っている〉 〈視覚障がい者のことを考えるようになった〉	15	12	2
	社会をつなぐ役割	パピーを介して他者とのかかわりが促進されたり，出会いのきっかけになった。	〈散歩をしているとき，男女，大人，子どもを問わず，いろんな人に話しかけられる〉 〈パピーを通して人の輪が広がった〉	10	9	8
	家族をつなぐ役割	パピーのおかげで家庭が明るくなり，話題が増え，凝集性が高まるという発言	〈家族で一緒に出かけたりするのがふえた〉 〈家族間が一体となった感じ〉	12	22	18
	健康促進	パピーのおかげで規則的な生活が送れ，散歩で運動量が増え，健康になったという発言。	〈餌や散歩があるので，規則的な生活を送るようになった〉 〈散歩に行くので，毎日運動をするようになった〉	7	5	4
	ストレス軽減	パピーと一緒にいるといやされる，気分が落ち着くなどストレスが軽減されたという発言	〈存在自体が癒し〉 〈パピーの傍にいると落ち着く〉	5	7	24
	快適なかかわり	楽しい，おもしろいといったパピーとの快適なかかわり	〈一緒にいると楽しくなってくる〉 〈家の中で遊び相手が増えた〉	14	13	54
	責任感	あずかりものなので，事故，怪我，病気に気を遣うという発言。	〈やっぱり，事故，怪我，病気というのには神経を使っている〉 〈ちょっとでも具合悪いと獣医さんに連れていく〉	19	24	9
	経験の広がり	パピーのおかげで経験広がった	〈やっぱり，事故，怪我，病気というのには神経を使っている〉 〈ちょっとでも具合悪いと獣医さんに連れていく〉	11	6	1
パピー飼育の子どもへの影響	情操教育	責任感や忍耐力，共感性が身に付いたという発言。	〈パピーのことを思いやれるようになった〉 〈責任感が身に付いた〉	8	4	
	世話	育てたり，世話をしたりといった経験になっているという発言。	〈ご飯の時間などをいつも気にしてあげている〉 〈トイレの世話をしてあげている〉	10	11	
	緩衝する役割	学校や塾などの集団生活でのストレスを軽減したり，家庭での喧嘩時の緩衝の役割になっているという発言。	〈子どもが，学校から疲れて帰ってきて，パピーに抱きつくと癒されている様子〉 〈パピーが来てから，きょうだいの喧嘩が減った〉	7	17	
	成長	子どもがPWを行うことで成長するという発言。	〈子どもがパピーと一緒に成長する〉 〈パピーを飼育することで，子どもがしっかりした〉	13	12	
	社会貢献への意識	盲導犬や視覚障がい者を考えるようになり，ボランティアへの意識が高まったという発言。	〈盲導犬や視覚障がいの方のことを調べたりするようになった〉 〈PWを経験することでボランティアへの意識が身に付いた〉	9	9	
飼育のたいへんさ	環境整備	外出の制限や環境の整備に困難をかかえたという発言。	〈外出するときに，パピーのことを考えないといけなくなった〉 〈パピーを迎えるために，家の中や近所との環境整備が必要だった〉	10	7	4
	しつけ	最初の数か月のたいへんさや，トイレのしつけに困難をかかえたという発言。	〈家にパピーがきて，最初の1，2カ月はトイレを覚えるまでたいへんだった〉 〈最初は，机などをかじってたいへんだった〉	9	17	3
	犬の性質	毛が抜ける，拾い食いといった犬の性質に対するたいへんさに関する発言。	〈毛がすごく落ちるからたいへん〉 〈はじめはなんでも口に入れてたいへんだった〉	5	6	15
	世話のたいへんさ	散歩や病気など世話のたいへんさに関する発言。	〈体調を崩して下痢をしてたいへんだった〉 〈思ったよりもお世話がたいへん〉	3	3	3
	世間の非理解	盲導犬の仕事への不理解，別れに対するあわれみなどの世間の不理解に関する発言。	〈「盲導犬はかわいそう」と知らない人から言われた〉 〈盲導犬は誤解されている部分もある〉	0	7	1
			合計	167	191	146
						504

以上の結果から、パピーと家族は快適な関係を築き、パピーがいることで会話が増えたりまとまったり、家族成員のストレスが軽減され、穏やかになると考えられた。そして、パピーを通して視覚障がい者のことを意識することや、将来の盲導犬を預かっているという責任感から、適切な飼育を行うために努力して、しつけや世話を行っていたことが分かった。また、朝夕の散歩は、規則正しい生活リズムや心地よさ、健康を促進し、親子でゆっくりと話をする機会を与えていたことが分かった。以上から、パピーの育成は、家族全員で協力して行うため、家族関係が凝集され、以前より親密になることが示唆された。

一方、多くの子どもが発言していたのは、楽しいおもしろいといった「快適なかかわり」のカテゴリであった。子どものほとんどが、パピーを自分より年下のきょうだいのような存在であると捉えていた。パピーは子どもの遊び相手となり、ひとりっこや末っ子にとって、かわいがったり、世話をしたり、ときには兄弟葛藤を起こしたり、リーダシップを発揮する機会を与える対象であると考えられた。少子化が進み、きょうだい数が減少した現在において、家庭内の養護する対象の存在は、子どもの責任感や愛他性の発達にとって重要であると考えられた。

(2) パピー育成中（育成)、訓練センター入所前（前)、訓練センター入所後（後）の面接データを元に、具体的なエピソードを引用して考察した。(　) には面接時期と発言者を記入した。

とまどいと混乱　育成初期の特徴として、「最初の１カ月、そこらじゅうにおしっこされて、もう大変でした（育成；母 I)」、「最初はたいへんでしたね。聞いていたよりもたいへんでした（育成；父 C)」という語りのように、パピーがやってきた当初は、飼育にとまどい、家族が混乱している様子が語られた。

愛着形成から巣立ちへ　「家族のペースになってきて、お互いにタイミングが合うようになってきたというか。言ってるのもわかるようになってきたし。(前；母 A)」、「コミュニケーションをとれるようになりましたね。そうするとやっぱり、ぐっとかわいくなりますよね。気持ちが大分、ぐっと距離が縮まって(前；父 E)」という語りのように、家族の協力や慣れ、パピーとのコミュニケーションが円滑になるとともに混乱は徐々に収まっていくと考えられた。また、「これからがあるし。普通のペットだったらけがしても時間があるっていうか、余裕があるけど、パピーはそうじゃないから気を使ってる(前;子 H)」の語りのように、子どもたちは、楽しいだけではなく、盲導犬育成に関しての責任を実感していくことが示唆された。

両親の「右も左もわからない、トイレもわからない子にトイレを教えたり、人間のおむつを外すのと同じですよね。ご飯を食べさせて運動させて、刺激も与えて、夜が来たから寝かせてで、成長していく。子育てと重なる（前；母 B)」という語りのように、パピー育成は子育てを想起させる経験であることが分かった。さらに、「やっぱり使命を持っているっていうか、ただいてくれればいい犬じゃなかったから、本当に自分の子どもの将来何になるのかなっていう、大きくなったらっていうシミュレーションをしてくれた感じがする（前；母 H)」、「子どもをいつまでも手元に置いておくというよりも、いつかは離れるというのがあるじゃないですか。そういう感じで見送る（前；母 A)」のように、自身の子別れの準備となっていたことが分かった。

パピーが訓練所に入所し訓練を受けた後は、盲導犬になるか、盲導犬に適しない場合は啓発犬か家庭犬になることから、「盲導犬

のユーザーさんと会って、より盲導犬になってほしいという気持ちもより強くなったんですよ。けど、かわいくて、ずっと情が移ってきて、うちにいてほしいという気持ちもより強くなってる。両方強くなってるから、同じくらいかな（前；母C)」という語りのように複雑に気持ちが入り混じっていたり、盲導犬使用者と接する機会を得て、「盲導犬になって、だれかの幸せを手助けする犬になってほしいなって思いました。(前；母D)」と、盲導犬への意識を強める協力者もいた。別れに関しては、「巣立っていくという、そんな感覚（前；父E)」という語りのように、別れた後も、関係や絆がつながっていると考えていたことが分かった。また、「ペットより家族に近い感じ。人間に近い。訓練してなれたら盲導犬になってという見える未来がある（後；子A)」、「この子は、これから重たい責任を背負って生きていくというのもあるので。犬がかわいいななんていうのと、この子がかわいいと思うのと種類が違いますよね。やっぱりペットと同じ感覚では見てないですよね（前；母E)」、「犬と人との間のような存在（前；父、母A)」のように、将来の仕事があるパピーはペットより人間の家族に近い存在として捉えられていた。

喪失経験とバリアフリーの意識へ　訓練センター入所後の調査では、「寂しくてしょうがない（後；母C)」、「寂しい気持ちは結構ありますね（後；父F)」という気持ちをほとんどの家族が持っていた。しかし、「盲導犬になった生活は、幸せで生きがいがあるだろうから、引退したら帰ってくればいいかな。（後；父H)」、「ブリーディングですごいかわいがってもらえるし、パピーはPWで、盲導犬のユーザーさんで、引退犬は引退犬ボランティアで、それぞれ精いっぱいかわいがってもらえる（後；母H)」、「犬に何かあったら駆けつけてくれる人が結構いっぱいいると思う（後；子H)」と盲導犬の幸せな一生を考え、「盲導犬に向いているならなってほしいし、向いていないなら戻ってきてほしい（後；子A)」、「会いたい気持ちはあるけど、盲導犬になってほしいという気持ちもある。そのために生まれてきた犬だから。がんばれって言ってあげたい（後；子I)」と、入所前には引き続きパピーを飼いたいという希望が強かった子どもたちも、PWの意味付けを考え、盲導犬になることを一番に希望して、送り出していた。また、「盲導犬になって幸せに暮らしていますというのが分かったら、すごく嬉しいかな（後；母C)」、「元気でいればいいかな（前；母・父B)」と多くの協力者が語っており、パピーの幸せを願う親のような気持ちを持っていたと考えられた。さらに、「ボランティアだし盲導犬になってくれたら嬉しいし、そういうことだからまたPWをやりたい（後；子H)」という語りのように、環境が整い、現在のパピーが戻ってこなければ、今後もPWをやりたいという希望を持っている家族が多かった。そして、「子どもが、パピーを通して自然と意識しないで、障がいのことを特別なことではなく身近なものとしている（後；母B)」、「いるときは世話でいっぱいだったけど。目の見えない人のことまで実は考えてなかったけど、そういう方のことを考えるようになった（後；母E)」、「障がいのある方たちに関心がむくようになり、物の見方が変わった（後；母J)」、「PWをすることとか、もっと先にある、PWをやっていることが目の不自由な方につながっている、支えになる（後；父A)」、「盲導犬になると、目の見えない人の役に立って、その人が喜んでくれる（後；子F)」ように、入所後に視覚障がい者のことを考え、障がいを身近なものとして捉えるという意識が広がっていった。

盲導犬候補子犬の育成と別れの経験は、単なる動物飼育経験ではなく約10ヶ月のボランティア経験である。家族は楽しみながら、パピーとの関係から恩恵を受けながら育成しているのである。特に、子どもたちは、楽しんでパピーを飼育しており、守るべき年下のきょうだいのように接し世話を行っていた。世話やしつけなど、たいへんながらも一生懸命になるのである。子どもたちの多くは、パピーを引き続き飼いたいと願っていたが、視覚障がい者や訓練をがんばるパピーのために、大切な家族であるパピーを送り出す。この経験は、おそらく初めての強い愛着対象の喪失経験であり、自分の欲求を抑えて他者のために行う。そして、子どもたちは、家族に支えられながら、パピーや視覚障がい者に思いを馳せ、喪失に向き合い自問自答を繰り返し、自ら立ち直っていく。このような経験は、共感性や責任感、忍耐力等の心の発達に重要な影響を与えると考えられた。

(3)本研究の意義と展望

本研究の結果から以下の3つの意義と展望があると考えられる。

①国内外でパピーウォーカーの心理学的研究はほとんどないので、盲導犬の研究に示唆を与え、盲導犬の普及啓発に寄与できる。

②盲導犬候補子犬育成と別れという課題を家族で乗り越えるプロセスを縦断的に明らかにしたので、現在の希薄になり孤立した家族関係の介入援助に示唆を与える。

③対象（パピー）に愛着をいだき、愛着対象を喪失し受容する一連のプロセスを統制された条件（同期間、目的、パピー）のもと縦断的に明らかにしたので、愛着と喪失研究に示唆を与える。

総合考察　パピーは、将来盲導犬になる可能性があり、PWは社会貢献に関わる家族総出で行うボランティアである。盲導犬育成事業という目的で考えれば、人と共に生活をして、愛情を受けて育ったパピーは、視覚障がい者のパートナーとして必要な人に対する愛着基盤を形成する。このことは、パピーが人と関係を築くときの重要な基礎となる。

家族で相談しながら、問題を解決しながら、盲導犬候補子犬の育成事業に携わり、その先の視覚障がい者のことを意識しバリアフリーの社会を考え、家族が一致団結してパピーを育成し、愛着対象の喪失の悲しみを共に乗り越える。このような家族で一つの目標に向かって団結し、愛着や喪失の経験をすることが、家族関係や子どもの発達に影響を与えると考えられた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

濱野佐代子、盲導犬パピーウォーカーの家族と盲導犬候補パピーの愛着；父親、母親、子どもの特徴の検討、白百合女子大学発達臨床センター紀要、査読無、Vol12、2009、49-56.

〔学会発表〕（計４件）

①濱野佐代子、パピーウォーカー経験が子どもに与える影響；盲導犬候補の子犬を育てる経験、第21回日本発達心理学会、2010年3月26日、神戸国際会議場.

②濱野佐代子、パピーウォーカーと盲導犬パピーの関係への意識調査；パピーとペットの差異の検討、第51回日本教育心理学会、2009年9月21日、静岡大学.

③一色雅、濱野佐代子、角田祐子、吉川明、パピーウォーカーの意識調査－盲導犬候補犬の飼育環境および、パピーウォーカー応募の動機と影響、日本身体障害者補助犬学会2008シンポジウム、2008年10月25日、日本盲導犬協会総合センター.

④安藤孝敏、長田久雄、濱野佐代子、金児恵、ワークショップ「ヒューマン・アニマル・ボンド-研究最前線-」、日本心理学会第72回大会、2008年9月20日、北海道大学.

６．研究組織

(1)研究代表者

濱野　佐代子（HAMANO SAYOKO）
帝京科学大学・こども学部・准教授
研究者番号：90413137

(2)研究分担者（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者（　　）

研究者番号：